

# 2023 年度入学試験問題

## 国 語

### 注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の注意事項をよく読んでください。  
その際、問題冊子を開いてはいけません。
2. この問題冊子のページ数は 33 ページです。
3. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手をあげて監督者に知らせなさい。
4. 解答は解答用紙の問題番号に対応した解答欄ごとに 1 つだけをマークすること。  
同じ解答欄に 2 つ以上マークすると無効となります。なお、解答用紙の番号は①～⑥まで記入してありますが、問題によっては解答する選択肢が 6 つ無い場合もあります。
5. 解答は HB の黒鉛筆を使用すること。
6. 誤ってマークした場合は、消しゴムできれいに消し、消しくずを完全に取り除いたうえ、新たにマークし直すこと。
7. 問題冊子の余白等は自由に利用してかまいません。
8. 解答用紙を持ち出してはいけません。
9. 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

## 第一問

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

客観的な人間は自立した者ではない、というのはまた強烈な言葉だが、他方では、他者を理解することができず、そもそもそういう努力すらしない人もいる。こうしたキャラクターの人々は、他者を客観的に観察するのが苦手で、フラットな知覚力を使う前に、まず他人を自分の物差しでカテゴライズし、評価し、支配しようとしがちだ。自分の物差しがあるということは、強い自分自身があるということであり、自分の意見を持っているということだが、同時にこういう人々はいわゆる「暗黙のバイアス」によって、<sup>(ア)</sup>ヘンケンに満ちた判断を下す。強い支配者、という感じだ。ストロングなヒーローに客観性や観察力はいらぬのかもしれない。

ニーチェの論では、エンパシーに長けた人々は空疎な「道具」や相手を映すだけの受動的な「鏡」になって自己を喪失する。それだけに、そういう個人が強烈な自我を持つ他者と出くわすと、まるでエンパシーの対象が自己になったかのような感情移入をし、自分を明け渡してしまうことがあると<sup>(注1)</sup>ブライトハウプトは指摘している。究極の「推し」ができる状態だろう（トランプ前大統領の支持者になぜか気のいい人たちが多いというのも、これで説明がつくかもしれない）。

実際、このことを考えると、<sup>(注2)</sup>デヴィッド・グレーバーが、労働者階級の思いやりについて嘆いた記事を思い出してしまふ。2014年にガーディアン紙に寄稿した記事（“Caring too much. That's the curse of the working classes” [2014.3.26]）の中で、グレーバーは、労働者たちは支配階級に比べて自己中心的ではなく、他者をケアする助け合いの精神が強いと指摘した。

労働者階級と言うと鉄鋼労働者や炭鉱労働者などマッチョなイメージが浮かびがちだが、実は、長いスパンで歴史を振り返ると、労働者階級は裕福な家族の世話をする仕事をしてきた階級だったとグレーバーは説いた。<sup>(注3)</sup>実際、マルクスやディケンズ時代の労働者階級の街の住人は、メイドや清掃人、料理人、靴磨き等々、裕福なお屋敷に住む人々に雇われ、お金持ちの家族の様々なニーズを満たし、ケアすることで生計を立てていた人が多かったのだと。

これは現代の先進国にも通じることだろう。製造業が衰退し、労働者階級の中心は介護士や保育士、看護師などのケア労働者

か、またはサービス業従事者になっている。現代でも中上流階級の人々はケア労働をする人々を雇う。介護を代行してくれる人、子どもの面倒を見てくれる人、家の掃除をしてくれる人、食事を作ってくれる人、それを運んでくれる人、等々である。つまり、社会の構造はマルクスやディケンズの時代に戻っているとと言えるかもしれない。

ケア労働をする人々は、雇用主（ケアの対象）の気持ちを推し量ろうとする。それが職業の基本だからだ。この人は自分に何をしてほしいのだろう、何をしたらもっとも喜ばれるのだろう、何をしたら嫌がられるのだろうと、「相手の靴を履いて考える」ことなしにケアの仕事は成立しない。他者をケアする（助ける）性質が労働者階級特有のものになったのはこのせいだとグレイバーは言う。富と権力を持つ人々は、逆に下々のことなど気にしない。人の顔色を窺って生きていく必要のない階級だからだ。

また、ケア階級について語るとき、触れておくべきことに<sup>(1)</sup>「感情労働」の問題がある。

この言葉は米国の社会学者A・R・ホックシールドが1983年に発表した著書『管理される心―感情が商品になるとき』の中で使ったもので、シンプルに言えば感情の抑制や鈍麻、緊張や忍耐を強いられる職業のことだ。

「肉体労働」「頭脳労働」に対して、「感情労働」も存在するというのである。

ホックシールドが前述の本の中で典型例として挙げたのは旅客機の客室乗務員だった。相手（客）のどのような失礼や、無茶な要求にも、自らの感情を押し殺して笑顔で耐え、常に礼儀正しく丁寧に対応する仕事である。サービス業の従事者は多かれ少なかれほとんど同じことをしていると云っていい。コールセンターのカスタマー・ケアやヘルプデスク、秘書、受付、苦情処理係、ホスト、ホステス、セックスワーカー、企業の営業担当者など、様々な職業の人々が感情労働を行っている。これらサービス業に加えて、介護士や看護師、保育士、教員などもここに加えられるようになった。

しかし、2010年代後半になると、米国のジャーナリスト、ジェマ・ハートリーが「感情労働は男性がいまだに理解しない無償の仕事だ」という主旨の記事を発表し、ジェンダーの問題として再び「感情労働」を取り上げたことで、この言葉がリバイバルし、再び脚光が当たることになった。この言葉を最初に提唱したホックシールド本人は、2018年のThe Atlanticのインタビューで「感情労働」が家事を指す言葉として使われるのは意味の拡大のし過ぎだと思っていると話しているが、世界中の女性た

ちがこの組み合わせに飛びついた気持ちはわからなくもない。

例えば、英語圏の国には「ハッピー・ワイフ、ハッピー・ライフ」という昔からよく使われてきた表現があり、男女平等が謳われる現代では時代遅れの言葉と見なされている。「妻の機嫌を取っておけば幸福になれる」という男性側からの上から目線の言葉はセクシスト（性差別主義者）的であり、結婚の成功は双方の幸福に基づくものだろうというのがこの言葉を「時代遅れ」と言う人々の主張だ。

**B**、こういう考え方もできると思う。それは、なぜ「ハッピー・ハズバンド、ハッピー・ライフ」とは言われて来なかったのかということだ。それは、女性は常に家庭で男性をハッピーにするために陰で様々な無償の労働をしてきたからであり（男性がしわくちやのシャツを着て仕事に行かずに済むようアイロンをかけるとか、仕事から帰ってきたら飲めるようにビールの缶の数を確認し、なくなったら買い足して冷蔵庫に入れるとか）、いまさらそんな言葉を使う意味も必要性もないからだ。

**C**、女性の場合は、ハズバンドはハッピーでも自分自身のライフはハッピーどころか疲れきっていることが多い。このことは、実は前出の記事でグレイバーも指摘していることで、社会において不平等が存在する場所では、下側にいる者のほうが上の者のことを気にかけ、上側の者は下の者をそこまで考えたりしないのであり、これは昔からフェミニストが主張してきたことだった。つまり、女性は男性のことを考えている相手のために心配したりするが、男性は女性をそこまでケアしないというのだ。そして、これは黒人と白人の関係や被雇用者と雇用主、貧困層と富裕層の関係にもスライドできるといえる。

面白いことに、ホックシールド自身が「拡大解釈されすぎ」と言う「感情労働」の定義のほうでも、近年では、必ずしも「感情労働」に分類されていない職場における「自覚なき差別」（レイシズム、セクシズム、ホモフォビック、トランスフォビック等々）に煩わされているマイノリティーたちの「感情の管理」も含まれている。同僚や上司の「自覚なき差別」が本当は気になっていなのに、なんでもないような顔をして働いていたり、ある人種やジェンダーのステレオタイプに一致する人物にならないよう、わざと自分とは違う性格を演じていたりするケースがそれにあたる。

**D**、感情労働には（客や同僚や男性配偶者などの）他者の気持ちやリアクションを常に気につけて、それが実際の業務

にプラスする形でしかかってくる部分がある。

こうして、「他者の靴を履くこと」と「他者の顔色を窺うこと」が紙ヒト<sup>(1)</sup>になり、混ざり合うのだ。「下」の人間は、「上」に立つ人々のことを考え、知るようになると同情の念を抱き始めるので、相手にひどいことをされても、その背景にある事情を考えてしまう。だから、例えば政府が緊縮財政で厳しい財政支出の削減を行い、福祉や医療、教育などのサービスが目に見えて劣化し、自分たちの生活が苦しくなっても、労働者階級はお上の事情を考えてしまうのだ。

労働者階級の人々に染みついている「助け合いの精神」を刺激するようなスローガン（例えば、「この国はこのままでは破産します」「未来の世代のためにみんなで我慢して借金を減らしましょう」など）を使って政府が福祉や医療などへの投資をケチっている理由を説明すると、なぜか当の苦しんでいる庶民のほうが「じゃあみんなががんばって我慢しよう」と政府を支持してしまふのである。

支配者たちはまったく庶民の生活の厳しさなど考えもせず（だいたい成功する人たちは強い自我を持つ人たちなので）、ただ財政規律を守ったという数字の実績を残して自分が出世したいために福祉や医療や教育への支出を削り続けているだけかもしれないのに、下々の者が為政者へのいらぬエンパシーを発揮してしまうのだ。「政府にも苦しい財政事情があるのだから」と。労働者階級出身のグレーバーは、この庶民の思いやりについてアンビバレントな思いを抱きつつ、<sup>(2)</sup>「我々の優しさが武器となつて我々を襲ってきている」と書いた。

**E** 庶民は、巧妙にお上<sup>じやう</sup>が拵<sup>よそぎ</sup>えた物語（例えば、「政府にはお金がないので、すべての人々が互いを支え合い、みんなが平等に参加・貢献できる社会を実現するために、貧困層から富裕層まで同じ税率で支払う消費税を増税します」とか）に騙され、経済的搾取のみならず、エンパシーまで搾取されてしまうのだ。

エンパシーを搾取されきった状態になると、人は政権に従順になり、その決定に抗う人々が他者への思いやりのない「邪悪な人」に見えてくる。それがエスカレートするとジ<sup>(ウ)</sup>ケイ団のようなやり方で「邪悪な人」たちを攻撃さえするようになるのかもしれない。彼らはもはや自己を喪失し、政権を握る人々を映す鏡となっているのだ。

「鏡」となった人は、常に映す対象を必要とする。そのことをブライトハウプトはこう書いている。

ニーチェが示唆するところによれば、エンパシーは、無私になって外側からの刺激を待つことを必要とする。

こういう人（つまり「鏡」や「道具」）が増えるかどうかという社会ができるかということ想像してみたい。無私状態で外側からの刺激を待っている人が多いと、強烈な自己を持つ人を「鏡」に映してしまったとき、その対象に簡単に支配されてしまうのではないだろうか。

ブライトハウプトは、現代のエンパシー信仰（エンパシーとは絶対に良いものであり、けっして悪いものにはなり得ないとする見方）に対する反論として、ニーチェの「超人」のコンセプトを使っている。彼は、こう書いている。

エンパシーを働かせる人は、憧憬の罫に落ちる。彼らは、尊敬すべき強く自由な自己を作り上げる（暴君、ワイルドな男性、または、何であれ彼ら自身が欲していることをする情熱的な存在）。この作り上げられた自己が、ニーチェが『ツァラトゥーストラはこう語った』で描いたかの有名な超人である。それに比べると、エンパシーを働かせる側の人間は、フラットで空疎にくすみ、私心がない。

エンパシーを働かせるために自己を失う人は、もともと持っていた自分自身を失うのではなく、エンパシーの対象である強烈な自己との比較によって、自分の自我のなさを感じてどんどん無私になっていくのだとブライトハウプトは主張する。そうなってしまうと、空疎でキハク(4)に感じる自分を、強烈な自我を持つ他者に譲り渡してしまうことになりかねない。その例として彼があげているのがストックホルム症候群だ。

1973年にスウェーデンの首都ストックホルムの銀行で起きた5日間の立てこもり事件で、4人の人質たちは最初は犯人を恐れていたが、だんだん心情に変化が生じ、犯人に対して協力的になり、人質が警察に銃を向けたりして犯人をかばうようになる。この犯人と被害者の奇妙な心理的つながりを以降ストックホルム症候群と呼ぶようになった。

一般に、ストックホルム症候群をエンパシーと関連付けて語る人はいない。こうした現象が起きるのは、誘拐事件や監禁事件などの非常に限定的でレアなケースであり、長い時間を共に過ごすことによって奇妙な心理的つながりが犯人と被害者の間に出来ると信じられている。この心理的つながりが発生する原因は、被害者が生き延びるための無意識の生存戦略だと言われることも多い。だが、ブライトハウプトはここにもニーチェが言ったエンパシーの危険性が露見していると言う。つまり、観察の対象が、観察者よりも肉体的・メンタル的に強靱でパワフルな場合、観察している側が自らをどんどん空虚に感じて、相手に自分を明け渡すというのだ。

ブライトハウプトは、こうした人間の心理的な動きは、一部の企業や軍隊における研修の手法においても見られるのではないと言う。また、結婚も、部分的にせよ自己の明け渡しを強制される意味では似ていると彼は書く。

もちろん、強盗や誘拐事件と企業の研修や結婚などを比較するのは飛躍が過ぎる気もするが、しかし、女性が男性に、子どもが父親に自己を明け渡すことが、法的に要求されてきたことは歴史を振り返れば事実である。このようにあからさまな非対称性が歴史の中で長いあいだ（特に、女性や子どもの側に）受け入れられてきた背景を考えると、<sup>(3)</sup>ストックホルム症候群と夫婦や家族はまったく無関係でもないのではないかと思えてくる。

ブライトハウプトは、ストックホルム症候群は極端な形の結婚生活にも見られるのではないかと書いている。これを読んでまず思いつくのがDVだろう。DVは必ずと言っていいほどエスカレートする。それを知っていながら、少しずつひどくなっていく相手からの暴力に脅えながらも、「いや、この人もつらいのだから」「こんなことを相手にさせてしまう自分の態度が悪かったのだ」と、被害者が加害者の靴を履き続けるために取り返しのつかない結果になってしまうケースは多い。自己を相手に譲り渡していなければ、自らの身体や生命を脅かす状況になる兆しを感じ取ったらずまず逃げるはずなのである。第三者から見ている

と、どうして逃げないのかというようなDV被害者と加害者の関係や、一般に共依存と呼ばれる関係にも、闇落ちしたエンパシーの影がちらつきはしないだろうか。

また、ブライトハウプトは、どんな大企業でも、あるいは政府や国際機関でも、組織のトップは人間の姿をし、人間の顔を持っていなければいけないと分析する。組織の構成員には関係性を持ち、共感し、自分たちと感情を分け合う代表者が必要だということだ。これも、そもそも組織運営にはある種のエンパシー搾取が必要条件の一つとして組み込まれているからではないだろうか。巨大な組織になってくると、末端の構成員がトップに会う可能性はなくなってくる。このような場合には、想像力に訴える人物像を作り上げることが必要になってくる。創設者やCEOに関する逸話や伝説を企業が発信するのはそのためだ。人々が企業の創設者やCEOに寄せるエンパシーの度合いは、今日の職場における忠誠心を考えるときに重要なファクターになるといえるのだ。

そう考えると、エンパシーは個人を組織に従属させるツールにもなる。人間は常に一人の他者の靴しか履けず、複数の他者の靴をいっせいに履くことはできないという「エンパシーのスポットライト効果」を指摘したのはポール・ブルームだったが、逆にたった一人の靴を大勢の人間が履くことは可能だ。これを利用し、トップに立つ一人の人間に組織を象徴させれば、大人数の組織でも構成員の忠誠心を獲得することができ、政治的システムが出来上がって行く。トップが亡くなると構成員とのエンパシーによる忠誠を引き出す役割は、二代目、三代目のトップへと引き継がれる。だとすれば、どれほどAIが進化して人間よりも適切な判断を下すことができるようになったとしても、企業のトップに据えることはできないだろう。人間がAIの靴を履くことができるようになるまでは無理だ（もちろん、そうなる日が来ないとは誰にも言えない）。

ブライトハウプトの論を読むと、西洋文化におけるトップダウン型の古い支配の構造には、奴隷が主人へ向けるボトムアップ型のエンパシーの要素が入っていると考えずにはいられない。トップダウンとボトムアップの議論は昨今さかんに行われていることだが、トップダウン支配を可能にしているのがボトムアップのエンパシーだとすれば、グレーバーでなくとも悲しくなってくる。

そうなってくるとエンパシーはトップダウン型の支配に必須のものであり、上からの支配を維持・強化し、抑圧的な社会をつ



くるために欠かせないものになる。

こうした考え方で行けば、現代の米国の若者たちがエンパシーを失っていたとしても別に憂うべきことではないのではないかとブライトハウプトは論を進める。約10年前、『Changes in Dispositional Empathy in American College Students Over Time: A Meta-Analysis』という調査報告書が大きな話題になった。ミシガン大学の研究者、セイラ・コンラスが行ったこの調査で、当時とその30年前とを比較すると、カレッジの学生たちはエンパシーを40%失っていることが判明し、しかも、<sup>(4)</sup>2000年を越えるとエンパシー能力が著しく減少していたことがわかった。

エンパシーの定義についてはこの当ても激しい論争があった。それはコグニティブ・エンパシー（自分が他者の立場だったらどうだろうと考える想像力）のことなのか。それともシンパシーと同類のエモーション・エンパシー（共鳴、共感、同情）のことなのか。そして人々が他者に共感するのは自分のストレスのレベルを軽減するためなのか？

こうした議論は現在も続いているが、この調査でコンラスが用いたのは、「Interpersonal Reactivity（対人反応性）」の4つの分野だった。「他者の不幸に対する共感的配慮、またはシンパシー」「他者視点取得（他者の視点を想像してみる知的能力）」「ファンタジー、または本や映画の中のフィクションのキャラクターを想像して自分に重ねる傾向」「他者の不幸により感じる苦悶、すなわち個人的な苦痛（例えば『誰かが緊急時の助けを必死で求めていると、こっちまでオロオロしてしまう』）」の4分野だ。

現代のカレッジの学生たちは30年前の学生たちに比べ、「他者の不幸に対する共感的配慮、またはシンパシー」が48%も低かったという。「他者視点取得」でも34%低かった。

30年の時間の隔たりがあれば、当然ながら米国の社会状況や人口統計（人種、宗教など）は変わっている。それなのにまったく同じ質問を若者にして単純比較することは有効なのかという疑問は残る。しかし、それでもこの報告書が発表されると、メディアは「現代の若者たちは他者への思いやりをなくし、自己中心的になっている」と騒ぎ立てた。

だが、自己中心的でナルシステイックな若者が増えているということは本当にそんなに悪いことなのかとブライトハウプトは

疑問を投げかける。

なるほどニーチェ的に言えば、エンパシーに長ける人は自己がなくなり、強烈な対象に自分の意見やアイデンティティを譲渡しやすい。つまり、パワフルな対象に支配されやすいのだ。そうであれば、若い世代でエンパシーが減少していることは、自信を持った新たな世代の登場と考えることも可能だ。自分の事柄にかまけ、エゴイステックになれる人々が増えれば、強烈でカリスマティックな他者が現れたときに自分を明け渡し、その対象に自分のアイデンティティを重ねる人は逆に減るということだろう。

エゴイステック、自己中心的、ナルシステック、わがまま、などの言葉は一般的に悪いことだと言われる。しかし、これらが頭から「正義ではないもの」と認定され、社会から一掃しなければということになれば、一様にストックホルム症候群にかかりやすい人々の群れができてしまう。

ストックホルム症候群やDVなどにおける犯人が為政者で、被害者が民衆、と置き換えることすら可能であるような悪政が行われている場合にも、エンパシー体質の人々は権威に支配され続ける。そして、権力にハン(ハ)キを翻そうとする人々を「わがまま」と言っ(ハ)て糾弾することにさえなるのだ。

そうなつてくるとエンパシーに満ちた社会はたいそう抑圧的な場所になる。確かにこれはエンパシーのダークサイドであり得るだろう。逆に、わがままで自分勝手な人の多い社会のほうが自由で解放的な場所にさえ映って来る。

本書(注5)の冒頭で、アナキーとエンパシーは繋がっている気がする、というきわめて主観的な直感を述べ、アナキック・エンパシーという新しいエンパシーの種類を作る気概で書く、と大風呂敷を広げたのだったが、実は両者は繋がっているというより、繋(ハ)げなく(ハ)ては(ハ)なら(ハ)ないもの(ハ)ではないか。アナキー（あらゆる支配への拒否）という軸をしっかりとぶち込まなければ、エンパシーは知らぬ間に毒性のあるもの(ハ)に変わ(ハ)ってしまうかもしれないからだ。両者はセットでなければ、エンパシーそれだけでは(ハ)閻落ちする可能性があるのだ。

- (注1) ブライトハウプト——一九六七。フリッツ・アルヴェイン・ブライトハウプト。ドイツの認知科学者。
- (注2) デヴィッド・グレーバー——一九六一〜二〇二〇。アメリカの人類学者。
- (注3) デイケンズ——一八二二〜一八七〇。チャールズ・デイケンズ。イギリスの小説家。代表作『クリスマス・キャロル』。
- (注4) ポール・ブルーム——一九六三。アメリカの心理学者。
- (注5) 本書の冒頭で——問題文は出典の第10章にあたる。

\*問題の作成上の都合で本文の一部に手を加えている。

問1 傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を用いるものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号

は 1 ～ 5。

(ア) ヘンケン

1

① ヘンキヨウの地をさまよい歩く  
 ② フヘンフトウの立場で発言する  
 ③ これからヘンシユウ会議を始める  
 ④ ウイルスは自然界にヘンザイしている  
 ⑤ 割れた器のハヘンを集める

(イ) ヒトエ

2

① おばあちゃんのチエ袋  
 ② 野球はフエテである  
 ③ お供えをしてエコウする  
 ④ イチゴイチエの縁を大事にする  
 ⑤ 山のようなイオエの大波

(ウ) ジケイ

3

① 裁判所にケンケイを願ひ出る  
 ② 山をシャツケイにして庭を造る  
 ③ キケイな観察を下す  
 ④ 人々をケイモウする著作を出す  
 ⑤ 病後のケイカ観察をする

(エ) キハク

4

① 史料をハクソウして調べる  
 ② 混乱にハクシヤをかける  
 ③ センバクな考え方では困る  
 ④ 各地をヒョウハクする人生を送る  
 ⑤ 実力がハクチュウする

(オ) ハンキ

5

① 納入のキジツを守る  
 ② 事業をキドウに乗せる  
 ③ 投票をキケンする  
 ④ 開会式でキシユをつとめる  
 ⑤ 相手のキセンを制する

問2

空欄

A

く

E

を補うのに最も適当なものを、次の①く⑥のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。解答番号はA―6、B―7、C―8、D―9、E―10。

- ① いずれにせよ
- ② まして
- ③ しかし
- ④ むしろ
- ⑤ だからこそ
- ⑥ つまり

問3 傍線部(1)「『感情労働』の問題がある」とあるが、どのような問題か。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

11。

- ① 1980年代以降、常に感情を管理することが求められる仕事の範囲がそれまでのサービス業から介護士や看護師、保育士、教員へと広がり、また「感情労働」に分類されていない職場におけるマイノリティーたちの感情の管理も含まれるなど、理解に混乱をきたしている、ということ。
- ② 本来はサービス業に限って論じられた「感情労働」がジェンダーの問題として取り上げられたことを契機に、家庭における男女や、黒人と白人、被雇用者と雇用主、貧困層と富裕層の関係へと広がり、労働者階級にとどまらない、社会や政府の在り方が問われている、ということ。
- ③ ホックシールドの提唱した「感情労働」という言葉が、グレーバーによって「下側にいる者のほうが上の者のことを気かけ」と抽象化して捉えられ、さらにハートリーによってジェンダーの問題にすり替えられたのを受け、ホックシールドがマイノリティーの存在を指摘し、議論が活性化している、ということ。
- ④ サービス業に典型的に見られた、労働者が相手を忖度し自らの感情を押し殺して仕事に従事するという「感情労働」の概念が、今日では家庭内における女性の立場やマイノリティーたちのわざと自分とは違う性格を演じるケースへと拡大している、ということ。
- ⑤ 中上流階級の人々はケア労働する人々を雇うことで、他者の気持ちや推し量ろうとしなくなり、ケア労働する人は常に雇用主の顔色を窺って生きていくことになるという現代の先進国に共通する社会構造が、「感情労働」という概念を導入することで見直しを迫られるようになった、ということ。

問4 傍線部(2)「『我々の優しさが武器となって我々を襲ってきている』とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

12。

- ① 他者の気持ちやリアクションを常に気にかける庶民は、上に立つ人々の立場や事情などを理解し、支配者の経済的搾取を受けても支援し、また政権に抗うような庶民に対して攻撃するようになりかねない、ということ。
- ② 庶民は支配者に対して思いやりを持つことで知らず知らずのうちにエンパシーまで搾取されるので、政権に従順となり結果として経済的にも搾取され自らの生活を苦しめている、ということ。
- ③ 庶民の生活の厳しさなど考えない支配者に対して、「感情労働」をする庶民はエンパシーを政権に感じて自己を喪失し、他の庶民を「邪悪な人」に見立てて攻撃をする、ということ。
- ④ 支配者にエンパシーを持つようになった庶民は自分の自我のなさを感じて無私になることで、自分を他者に譲り渡し、政権を握る人々を映す鏡になる、ということ。
- ⑤ 庶民に染みついて「助け合いの精神」を支配者に向けることで、庶民にとって不都合な政策や要求を受け入れることがエンパシーを行使することで満足を得られる唯一の方法であると思いつまされる、ということ。

問5

傍線部(3)「ストックホルム症候群と夫婦や家族はまったく無関係でもないのではないかと思えてくる」とあるが、なぜこのように言えるのか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **13**。

- ① DV被害者と加害者の関係は、誘拐事件や監禁事件で長い時間を共に過ごすことによって生じる被害者と犯人との奇妙な心理的つながりと、生き延びるための無意識の生存戦略という点で共通するから。
- ② 夫婦や家族の中で長い間受け入れられてきた、女性や子どもは父親に従わざるを得ないという不釣り合いな力関係はストックホルム症候群の背景にある、強い者に自我を譲り渡す傾向に通じるから。
- ③ ストックホルム症候群も非対称的な力関係が作用する家庭内の人間関係も、ニーチェが指摘するようにエンパシーの対象である強烈な自己との比較によって自分の自我のなさを感じるからだから。
- ④ 家庭内で非対称的な人間関係を受け入れる人は社会に出ても組織のトップを前にした自我のなさを受け入れようとする点で、ストックホルム症候群の被害者と同じだから。
- ⑤ エンパシーは個人を組織に従属させるツールであるという点においては、犯人と人質の関係も父親と女性や子どもとの関係も同じであるから。



## 問6

傍線部(4)「2000年を超えるとエンパシー能力が著しく減少していたことがわかった」とあるが、筆者はこのことをどう受け止めているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

- ① 他者への思いやりがなく自己中心的になっていると捉えるのではなく、上からの支配に自己を明け渡すことがなくなるので、自由で解放的な社会につながる契機として評価している。
- ② 30年前の社会状況や人口統計を無視した調査に疑問を持ち、自己中心的でナルシステイックな若者が増えたところでエンパシー体質の人々が権威に支配されることに変わりはないと糾弾している。
- ③ エンパシー能力の減少によってアナーキーの力が強くなり、エンパシーの毒性が打ち消されて抑圧された社会から解放された社会に変化するであろうと好意的に捉えている。
- ④ 自分の事柄にかまけ、エゴイステイックになれる人が増えるので、強烈なカリスマテイックな他者に自分を明け渡したところで、その対象に自分のアイデンティティを重ねる人は減ると見ている。
- ⑤ ニーチェ的な見方やストックホルム症候群的な理解の仕方が否定され、アナーキーとエンパシーとが繋がった新たな民衆が生まれることを期待している。

問7

本文中の説明と合致するものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。解答番号は

15

・  
16

。

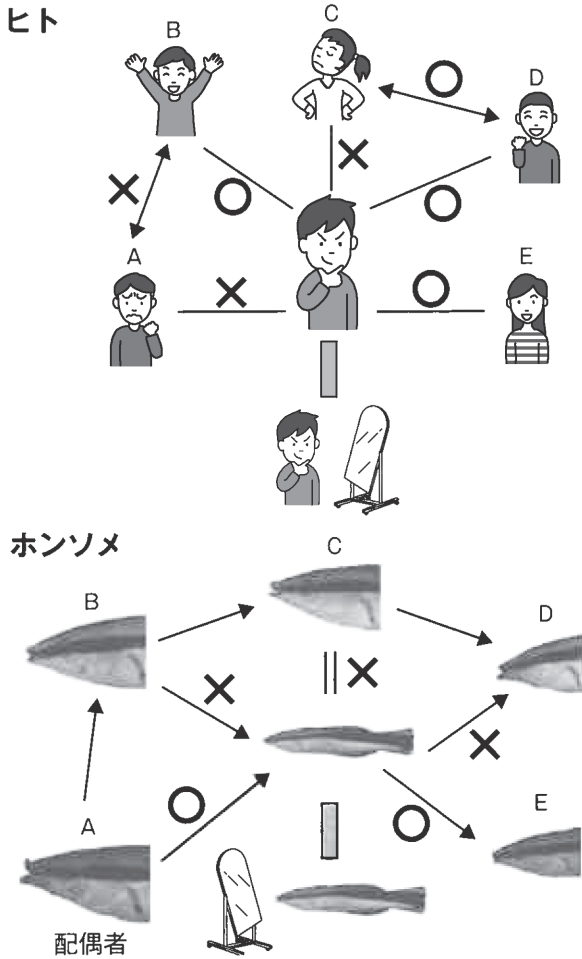
- ① ニーチェは、エンパシーに長けた人は強烈な自我を持つ他者に出くわすとエンパシーの対象が自己になったかのよう  
感情移入をし、相手を映すだけの受動的な「鏡」となって自己を喪失する、と論じた。
- ② グレーバーは、長いスパンで歴史を振り返ると、下側にいる者のほうが上の者を気に向け、他者を理解する助け合いの  
精神が強く、労働者階級の多くはサービス業的なもので生計を立てていたと指摘した。
- ③ ホックシールドは、肉体労働や頭脳労働に対して、常に礼儀正しく接することが求められる業務を「感情労働」とし、  
近年になって生じたサービス業の従事者がこれに当たると提唱した。
- ④ ブライトハウプトは、エンパシーは絶対に良いものであるとする現代の見方に対して、弱い立場の者が強い立場の者に  
自己を明け渡し、個人を組織や支配者に従属させるツールになると分析した。
- ⑤ コンラスの調査から導かれた、30年前に比べ現代では自己中心的でナルシステックな若者が増えたという結果に対し  
て、社会状況や人口統計の変化を考慮に入れていないという批判や、それが悪いことなのかという問題が提起されている。
- ⑥ ストックホルム症候群に代表されるエンパシー体質の人々が権威に支配される社会をより発展させるためには、わがま  
まで自分勝手な人の多い、パワフルな対象に支配されない社会が求められる。

## 第二問

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

これまで、他者認識や自己認識、社会関係の認識にまで踏み込んで、ヒトと動物が比較されたことはない。ヒトは顔心象で相手を識別し、個体間の社会関係、他個体と自分との社会関係も把握し生活している。この社会関係の認識は、<sup>(注1)</sup>ホンソメも似ているのだ。

わかりやすくイラストを用いて説明したい。この図では、中央の私は知り合い5名を個別に識別し、その人間関係も把握して



いる（例えば、AとBは仲が悪く、CとDは仲が良い）。同時に相手と自分の関係も把握している（例えば、俺はAとCが嫌いで、多分彼らも俺が嫌いだ。俺はB、D、Eは好きで、彼らも俺のことをよく思っている）。

ホンソメも、<sup>(注2)</sup>ハレム内の自分がよく知る相手個体は、ヒトと同様に顔心象で認識し、個々の個体を個別に認識している。中央にいる「私」は、親しい5個体を個別に識別している。ホンソメも、その関係性のネットワークの中に、自分という存在を入れて、第三者的に捉えているのではないだろうか。

野外のホンソメでは、ハレムの最大個体はハレムの雄であり、残りの雌の間には体の大きさ順の優劣関係があり、同じサイズの個体は縄張り関係となる。図の中央の私は、これらの他個体の社会関係（他個体の順位関係はAが最優位のA▽B▽C▽D▽E）や、自分と他個体との関係（B▽C≡私▽D）もきちんと認識できている。<sup>(1)</sup>野外のホンソメを見ていると中央の私は、自分より優位なBと出会うとすぐにへこへこし、劣位なDに対しては威張るのが見られる。見た途端に個々の相手を識別し、個々の性質と自分との社会関係を把握しており、それに応じて振る舞いを素早く変えるのだ。

ホンソメが、この順位関係を論理的に考えて推測する能力である「推移的推察」を持つことを我々はすでに確認している。

I 例えば、図でBは私より強いが、私はDより強い。そうすると、B▽私、かつ私▽Dであるから、B▽DであるとBとDの社会関係を直接見なくても推測できるのだ。ここでは、BとDの関係を第三者として捉えている自己が存在している。このような内面的自己意識に基づく認知能力は霊長類ではいくつも見られており、もはやヒトやチンパンジーの社会関係の把握能力と基本的には変わらないかもしれない。

ここまでで述べたいことは、ヒトもホンソメも自分を含めた識別個体との社会関係を認識していること、その際同じように、鏡像自己認知や写真自己認知はしていない（鏡も写真も海にはない）が、内面的自己意識を持つ、ということである。

II そのような「私」が、はじめて鏡を見たとき、はじめは未知の他個体と勘違いし、そのうちあれこれ不自然な行動をして自分であることを確かめ、ある時点で鏡像が自分であることに気づくのである。 III ヒトもホンソメも、鏡を見る前から社会関係の網の目という社会の中の自己が捉えられており、外見的自己意識だけではなく、繰り返すが、すでに内面的自己意識も持っているのだ。

IV

ホンソメにも個別の他個体の性格や相手との思い出などがあれば（きっとある。だからこそ特定の相手との順位などの関係が瞬時にわかる）、それは顔心象とは別の陳述記憶として存在している。おそらくそれも個人の事柄に関する心象であり、このあたりの他者の内面性のイメージ（心象）をどのように持っているのか、脳の中の心象と心象の関係のあり方を明らかにしていくことは次の課題になることは確かである。

V

最後に、社会関係の例からホンソメの内省的自己意識 (Meta Self-awareness) について考えてみたい。ここまで見てきたように、ヒトとホンソメはともに、内面的自己意識を持ち、自己を含めた社会関係を認識している。このとき、自分と相手との関係について、何がわかっているのかがわかっていないと、正しい振る舞いをすることはできない。ヒトの「私」なら、図のAとCには X 接するし、B・D・Eには、親しい仲間として心穏やかに接する。

ホンソメの場合はどうだろう。ホンソメの「私」はBにはへこへこ、Dには偉そうにと態度を変える。(坂井陽一さんによると) その社会関係は個体の消失や移入により頻繁に変動するが、それでも変動に応じた認識が速やかにとれる。このような変動の多い状況でも、魚も自分が相手を、相手も自分をどう思っているのかを認識していることの自覚があるからこそ、相手に応じたふさわしい Y な対応をとることができると考えられる。このように、ホンソメでも、個別に識別した個体との社会生活に内省的自己意識が育まれる素地が十分ありそうに思われる。むしろ、内省的自己意識なしには、彼らはあのような柔軟な社会生活を送れないと思われる。

大事な点なので、魚に内省的自己意識がある、という仮説をもう少し検討してみたい。「内省的自己意識」の英訳には、Meta Self-awareness が当てられる。その定義は難しいが、より多くの研究者が合意している定義を参考するのがよいだろう。一般的には、ある動物が①鏡像自己認知、②心の理論 (意図的だましが含まれる)、そして、③メタ認知 (自分の認識状態を認識できること。例えば、電話をかけようとして、番号がわからないことに気づき、調べるような場合) の3つができれば、その動物は内省的自己意識を持っているとする考えが有力だ。この 内省的自己意識を持つ ということは、さらに深い「ここ」を持つことを意味する。

ホンソメは鏡像自己認知ができる。しかも、自分の顔というイメージ (顔心象) の形成を伴う認知である。条件①はクリアーしている。

ホンソメに条件②の意図的だましができることは、ブシャリー教授が複数の論文で報告している。意図的だましとは、いわば

狼少年の嘘である。狼少年は、相手が騙されて大騒ぎするのを予想して「狼が来た」と嘘をつく。これは、騙す相手の心を読むで行うのであり、心の理論があることになる。実は、ホンソメもそんな嘘がつけるのだ。

掃除魚のホンソメは決まった掃除場所を持っていて、お客の魚がその掃除場所にやってくる。サンゴ礁では、小さな客が掃除されているところに、大きな魚が訪れてお店の様子を見ていることがある。ここでホンソメは、上手なところを見せようとして振る舞うのだ。次の大きな客が見ているからだ。上手かつ丁寧な掃除屋のふりをすれば、その大きな魚は次の客になってくれるとわかっていいるのだ。しかし、次の客が誰もいないと、丁寧な掃除はしない。つまり、ホンソメは自分がどう見られているのかを意識し、次の客を騙しているのである。このことは、室内実験でも検証されている。

条件③のメタ認知はどうか。ホンソメは鏡で喉の寄生虫を見たあと喉を擦り、さらに擦ったあと取れたかどうかを確認するかのように、擦ったあとの喉を鏡に映して見ている。ホンソメは、鏡に映さないと、寄生虫が取れたかどうか自分ではわからないことを、わかっているようである。<sup>(3)</sup>もし、そうだとすると、ホンソメはメタ認知ができるのかもしれない。残念ながら、ホンソメのメタ認知についてのしつかりした研究はまだである。現在、院生の小林大雅こばたけさんが取り組んでいる。

もし、ホンソメにメタ認知ができるとなると、ホンソメは内省的自己意識の3つの条件を満たしていることになり、ヒトや類人猿のレベルでの内省的自己意識を持つていること、つまり、立派な「こころ」を持つていることになる。魚がこころを持つているなどとは、10年前ではまったく、今でも多くの人には受け入れられないと思われる。今でも「魚が自己意識を持つ」と述べている研究者は、世界中でいない。データがないのと、考えが常識外れだからだ。しかし、これまで見てきたように、実験結果を客観的に読み解いていくと、「魚は自分を振り返ることができる」といえそうだ。

「ホンソメには内省的自己意識がある」あるいは「魚にもこころがある」との仮説は、今後検証していくべき大きな課題として位置づけてよいように思われる。おそらく様々な検証対象、検証項目、検証方法があると思う。私は、これから次々と検証例が出され、この仮説が支持されていくだろうと思っている。

（幸田正典『魚にも自分がわかる——動物認知研究の最先端』による）

(注1) ホンソメ——正式にはホンソメワケベラ。スズキ目・ベラ科・カンムリベラ亜種。体長12センチメートルほど。太平洋とインド洋に熱帯・亜熱帯の海に分布。房総半島以南の南日本で見られる。

(注2) ハレム——生物学用語。一雄多雌の集団。主として哺乳類に、また一部の魚類に見られる。

(注3) 坂井陽一——広島大学大学院教授。専門は水圏資源生物学、魚類行動生態学。

\*問題の作成上の都合で本文の一部に手を加えてある。

問1 本文中の空欄 I Ⅰ V のうちで、次の文を補う箇所として最も適當なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 17。

鏡の自己を認識したときにはじめて自己意識が生まれるのでは決していない。

- ① I ② II ③ III ④ IV ⑤ V

問2 空欄 X X Y を補うのに最も適當なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は 18・19。

- |   |         |           |         |         |          |
|---|---------|-----------|---------|---------|----------|
| X | ① 気を遣って | ② 地に足をつけて | ③ 腹を割って | ④ 意を決して | ⑤ 恐れをなして |
| Y | ① 緩急自在  | ② 臨機応変    | ③ 八方美人  | ④ 当意即妙  | ⑤ 縦横無尽   |
- 18 19



### 問3

傍線部(1)「野外のホンソメを見ていると中央の私は、自分より優位なBと出会うとすぐにヘコヘコし、劣位なDに対しては威張るのが見られる」とあるが、ここから導き出されることは何か。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 20。

- ① 個々の個体と自己を体の大きさに基づいて論理的に順位関係を推測できることから、霊長類と変わらない内省的自己意識があることがわかる。
- ② 個々の性質と自分の社会関係に応じて適切に振る舞うことができることから、関係性のネットワークの中で陳述記憶をたくわえていることがわかる。
- ③ 自分と他の個体との関係について体の大きさ順の優劣関係からその順位関係を認識できることから、外見的自己意識を持つことがわかる。
- ④ 他者の目で自己を含めた識別個体との社会関係が認識できることから、内面的自己意識に基づく認知能力を持っていることがわかる。
- ⑤ 自己を含めた個々の個体を個別に顔心象で認識できることから、鏡像自己認知や写真自己認知の可能性を持っていることがわかる。

#### 問4

傍線部(2)「内省的自己意識を持つということは、さらに深い『こころ』を持つことを意味する」とあるが、それはどのようなことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 21。

- ① 内省的自己意識がないと仮定すると、個体の差異に応じた振る舞いの変化の理由や、掃除屋のふりをする理由の説明ができなくなってしまうので、「こころ」を持つと言えるということ。
- ② 内省的自己意識を持つには鏡像自己認知、心の理論、メタ認知の3つが必要となり、これらの条件を満たすためにはおのずと「こころ」を持つことになるということ。
- ③ 内省的自己意識とは自分が相手を、相手が自分をどう思っているのかを認識する自覚のことであり、相手の振る舞いに応じて適切に対応する能力があるということ。
- ④ 内省的自己意識とは鏡像自己認知やメタ認知ができることであり、相手の存在や自己との個体差を踏まえた振る舞いをする行動力があるということ。
- ⑤ 内省的自己意識があつて初めて意図的だましができることから、自己の振る舞いに相手がどう反応するかを予想できる能力があるということ。

問5

傍線部(3)「もし、そうだとすると、ホンソメはメタ認知ができるのかもしれない」とあるが、なぜはつきり言い切れないのか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 22。

- ① 喉を鏡に写す振る舞いはメタ認知があると仮定した上での室内実験であり、仮定を証明するためには海の中での同様の検証も必要となるから。
- ② 喉を鏡に写す振る舞いが本当に寄生虫が取れたことを確認するためのものであると証明するには、まだ様々な検証対象や項目、方法があるから。
- ③ 喉を鏡に写す振る舞いはあくまでも院生による室内実験に過ぎず、野外での観察からはまだ確認されていないから。
- ④ 喉を鏡に写す振る舞いが鏡像自己認知か心の理論によるものかメタ認知なのかを見極めるためのデータがまだ十分でないから。
- ⑤ 喉を鏡に写す振る舞いが寄生虫が取れたことを確認するためのものではない切れず、他の可能性もあり得るから。

問6

本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

23。

- ① ホンソメは、自分がよく知る個々の個体を個別に識別し、そのネットワークの中では自分も入れて第三者的に捉えているはずである。
- ② ホンソメの持つ内面的自己意識に基づく認知能力は、ヒトやチンパンジーの社会関係の把握能力並みと言ってもよさそうだ。
- ③ ホンソメは自分の属するネットワークにおいて、自分が相手を、また相手が自分をどう思っているのかについての自覚があることが分かった。
- ④ ホンソメが鏡像自己認知や意図的だましができることは報告されているが、メタ認知ができるかどうかについての検証はまだなされていない。
- ⑤ ホンソメに内面的自己意識があることについては、今後の実験や検証によって確かめられるであろうと筆者は期待している。

### 第三問

以下の問いに答えよ。

問1 次の文の「と」と用法が同じものとして最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **24**。

今年も残りわずかとなった。

- ① 街で偶然中学時代の恩師と会った。
- ② 友達と一緒に学校へ通った。
- ③ 外に出ると雨が降っていた。
- ④ 一般論とは異なつた意見を述べた。
- ⑤ 降り始めてまもなく大雨となった。

問2 すべて正しい漢字が使われている文を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **25**。

- ① 出張の経費と運賃を成算する。
- ② 新入生の歓仰会を開催する。
- ③ 更正施設を出て社会復帰する。
- ④ 試行錯誤を経て漸く結論に辿り着いた。
- ⑤ 高齢化社会の倒来は予想以上に早かった。

問3

A・Bの外来語とその訳語の組み合わせとして正しくないものを、各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は 26・27。

A

26

- ① モダニズム―現代主義
- ② シュールレアリスム―超現実主義
- ③ アシンメトリー―左右対称
- ④ ロケーション―場所
- ⑤ プロポーション―割合

B

27

- ① メカニズム―機構
- ② プロシージャ―手続
- ③ プロジェクション―投影
- ④ コスモス―混沌
- ⑤ ドグマ―独断

問4 次のX～Zの漢字と読みの組み合わせとして正しくないものを、各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番

号は 28 ～ 30。

X 28

- ① 正念場—しょうねんば
- ② 野放図—のほうず
- ③ 居丈高—いじょうこう
- ④ 可及的—かきゆうてき
- ⑤ 醍醐味—だいごみ

Y 29

- ① 払拭—ふつしき
- ② 破綻—はたん
- ③ 流布—るふ
- ④ 会釈—かいしゃく
- ⑤ 凡例—はんれい

Z 30

- ① 氾濫—はんらん
- ② 風情—ふぜい
- ③ 鐘楼—しょうろう
- ④ 明晰—めいせき
- ⑤ 所詮—いわゆる

問5

次のX～Zの四字熟語の空欄

を補うのに最も適当なものを、各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答

番号は

～

。

① X 巧言  色

② 礼

③ 令

④ 黎

⑤ 零

① Y 換骨奪

② 怠

③ 載

④ 堆

⑤ 替

① Z 起死  生

② 改

③ 悔

④ 解

⑤ 回



問6 「不条理」の類語として適切でないものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **34**。

- ① 理不尽
- ② 不合理
- ③ 不首尾
- ④ 無理
- ⑤ 背理

問7 慣用句の使い方で正しいものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **35**。

- ① 人生の機微をうがつ作品を読んだ。
- ② 彼は柳眉を逆立てて怒った。
- ③ 発表の準備に現を抜かす。
- ④ 彼女は何でも話せる気の置ける人だ。
- ⑤ 人をあまり虚仮の一念にするな。

問8

作家と作品の組み合わせとして正しくないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

36。

- ① 坪内逍遙 — 『当世書生氣質』
- ② 二葉亭四迷 — 『浮雲』
- ③ 尾崎紅葉 — 『多情多恨』
- ④ 島崎藤村 — 『破戒』
- ⑤ 有島武郎 — 『お目出たき人』

## 【国語(2月25日)】

問題番号	正答	問題形式
1	2	一問一答
2	5	一問一答
3	3	一問一答
4	3	一問一答
5	4	一問一答
6	6	一問一答
7	3	一問一答
8	4	一問一答
9	1	一問一答
10	5	一問一答
11	4	一問一答
12	1	一問一答
13	2	一問一答
14	1	一問一答
15	4	複数組み合わせ順不問個別
16	5	複数組み合わせ順不問個別
17	3	一問一答
18	1	一問一答
19	2	一問一答
20	4	一問一答
21	3	一問一答
22	5	一問一答
23	2	一問一答
24	5	一問一答
25	4	一問一答
26	3	一問一答
27	4	一問一答
28	3	一問一答
29	4	一問一答
30	5	一問一答
31	3	一問一答
32	4	一問一答
33	5	一問一答
34	3	一問一答
35	1	一問一答
36	5	一問一答